

## 第2章 カッザーフィー政権崩壊後の混乱要因と背景 ——ベンガージを中心としたリビア東部地域に着目して

田中 友紀

### はじめに

リビアにおける反体制運動は、東部地域最大都市ベンガージ<sup>1</sup>から始まった。2011年2月15日、ベンガージ出身の人権派弁護士への不当逮捕に抗議するデモは瞬く間に広がり、いつしかムアンマル・カッザーフィー (Mu‘ammar al-Qadhāfi) 体制打倒への流れと変わった。この政変は「2月17日革命」と呼ばれる。しかし、カッザーフィー体制崩壊後、民主化は進むどころか、いまだ全く先の見えない暗闇の中である。一つの国家の中に、規模の違いはあるが、5つの政府が存在しており、政治の行方はいまだ不透明である<sup>2</sup>。2014年8月にエジプトに近いトゥブルクに世俗派政府が暫定的に設置され、首都トリポリにはムスリム同胞団 (Jam‘īya al-Ikhwān al-Muslimīn、以下同胞団) 傘下の政党議員を中心とした政府が存在している。2014年11月6日には、リビア最高裁判所が同年6月の代表議会選挙を憲法違反だとする判決を下し、トゥブルク側の政府の正当性を否定した。この政治的不安定化により治安の更なる悪化は避けられそうもない<sup>3</sup>。

この2月17日革命の発端となったベンガージを中心とするリビア東部地域では、カッザーフィー政権崩壊以降、新しい民兵組織が乱立した。特に新興のイスラーム組織は、政治家や治安関係者、著名人、人権活動家、外国人などに対する誘拐および殺害などに関与している<sup>4</sup>。2012年には米国大使殺害事件が発生した。また、リビア東部地域では、イスラーム主義組織だけでなく、自治を要求する連邦主義組織がリビア最大の石油積み出し港であるシドラ湾の石油ターミナルを占拠し、国民議会 (General National Congress: GNC, al-Mu‘tamar al-Waṭanī al-‘Ām) とのにらみ合いが続いた。このような暴力の犠牲者はベンガージだけでも1471人 (2014年) に上り、リビア全体の犠牲者の半数以上となっている [Libya Herald 1 Jan 2015]<sup>5</sup>。なぜ、2011年以降、東部地域の治安悪化が継続しているのだろうか。



図1. リビア地図

<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/ly.html>

本稿では、リビア東部地域の治安悪化に関与している「連邦主義」、「イスラーム主義」の2つの組織に着目して論じる。連邦主義組織の起源となるリビア王国はどのような経緯で成立したのか。他方で、リビアにおけるイスラーム主義組織はどのように誕生し、変容してきたのか。イスラーム主義の歴史は、カッザーフィー崩壊後に現れた新興のイスラーム武装組織とどのように連続しているのかを考察する。

まず第1節では、リビア王国時代に至るまでの歴史を説明し、連邦主義者の生まれた背景を述べたい。また同時代にリビア東部地域に流入してきた同胞団の影響についても論じる。第2節では、カッザーフィー時代に弾圧されたイスラーム主義組織について分析する。特にカッザーフィーの最大の脅威であったリビア・イスラーム闘争グループ (LIFG: Libyan Islamic Fighting Group, Al-Jamā'a al-Islāmiya al-Muqātila fi-Lībiya) について詳しく述べたい。第3節では、カッザーフィー政権崩壊以降、既存のイスラーム主義組織は新しい国家建設にどのように関与したのかを説明する。同時期にベンガージで乱立したイスラーム民兵組織は、既存のイスラーム組織とどのように関係しているのかを考察する。

## 1. リビア王国時代のイスラーム主義運動

### (1) キレナイカのサヌースィー教団

古来よりリビアは、フェニキア人に始まり、常に外部勢力から支配されてきた。しかし、ローマ人、アラブ人の支配も地中海に面する都市だけにとどまり、現在のリビアの領域全体が一つの国として統治された歴史はなかった。現在の国境に定まったのは、1951年のリビア連合王国独立の時である。

本稿で「バルカ (アラビア語で Barqa)」と呼ぶリビア東部地域は、北は地中海に面し、南縁はサハラ砂漠でアフリカ内陸部と繋がっている。このキレナイカ地域の中心都市であるベンガージと東部地域の中心であるトリポリは、地理的に大きく隔てられていたために共通の歴史を有したことはない。近代化の足音が聞こえる19世紀の初頭においても、トリポリとベンガージは別々の歴史を歩んでいた。その時代にキレナイカはオスマン帝国に統治されていたが、イスラーム神秘主義教団 (スーフィー) の一派であるサヌースィー教団がその勢力を広げつつあった。このサヌースィー教団の初代の指導者が、ムハンマド・アリー・サヌースィー (Muḥammad bin 'Alī al-Sanūsī, 以下大サヌースィー)<sup>6</sup>であった。

アルジェリア出身の大サヌースィーはメッカで修行をした後に出身地に戻ろうとした

が、アルジェリアがフランス軍に占領されていたために帰国は叶わなかった。そこでリビア内陸部にある、エジプトとの国境に近いオアシスの町ジャグブーブ (Jaghbūb) を本拠地として布教活動を始めた。そしてスーフィーの修道場であるザーウィヤ (zāwiya) をキレナイカ各地に建設し、争いが絶えなかったキレナイカの部族をまとめることに成功した。このサヌースィー教団による自治を、オスマン帝国は黙認した。

1911年にリビアを支配していたオスマン帝国がイタリア王国軍に敗れたため、キレナイカ地域は他のリビアの地域 (トリポリタニア及びフェザーン) と共にイタリア植民地領となった。イタリアの植民地支配を比較的早く受け入れた西部のトリポリタニアと異なり、キレナイカの内陸部では、ウマル・ムフタール (‘Umar Mukhtār) を中心とする部族連合が、最後までイタリア支配に抵抗した。この抵抗運動の中で、キレナイカは人口の半数以上を失ったという<sup>7</sup>。このような植民地支配に対するスタンスの違いも、キレナイカの人々がトリポリタニアと対立する原因のひとつとなっている。

第二次世界大戦後、トリポリを首都とする共和制国家を要求する西部のトリポリタニアとの話し合いがまとまらず、キレナイカは1949年に大サヌースィーの孫であるイドリース (Muḥammad Idrīs al-Mahdi al-Sanūsī) を君主とし首長国として独立しようと画策した。しかし、国際連合はキレナイカ首長国を承認せず、最終的にキレナイカ、トリポリタニアとフェザーンを統合して1つの国家とするよう決議した。こうして異なる歴史を持つ3地域は統合され、1951年に立憲君主制の王国として独立に至った。この王国は連邦制であった。それゆえ、1963年に連邦制が廃止されるまでの12年間、3地域の自治は保たれることになった。

## (2) サヌースィー教団とムスリム同胞団との関係

ムスリム同胞団は、1928年にエジプトでハサン・バンナー (Ḥasan al-Bannā) を中心に結成されたイスラームの復興を目指す組織である。1940年代末のエジプトではムスリム同胞団関係者に対する弾圧が激しさを増し、1949年にはバンナーが暗殺された。そのため、迫害を続けるムハンマド・アリー朝・エジプト王国から逃れて、複数の同胞団関係者がエジプトと国境を接するキレナイカに逃亡してきた。亡命先のエジプトからリビアに帰国したばかりのイドリースは、今後自らの地位を脅かすのは同胞団よりもナセル主義だと判断し、エジプトからの同胞団関係者を保護したという [Joffé 1988]。また1940年末から1950年代にかけてエジプトに留学していたリビア人学生も、同胞団のイデオロギーをリビア東

部地域に持ち込んだという。こうしてリビア・ムスリム同胞団は、1949年にイドリースの庇護の下で誕生した。しかしながら、時が経つにつれ、リビア・ムスリム同胞団はイドリースとは次第に距離を置くようになっていく。その理由は、傀儡とも呼ばれたイドリースの親欧米の政治姿勢にあった。1953年にリビア王国政府は、同時期に地中海最大と言われたトリポリのウィーラス（Wheelus）基地を20年間貸与するという軍事協定を英国と、1954年に米国と締結した。

## 2. カッザーフィー政権下のイスラーム主義運動

### (1) カッザーフィーとイスラーム

1969年9月、カッザーフィーを中心とした革命評議会（Revolutionary Command Council: 以下RCC）は軍事クーデタを成功させ、リビア王国は終焉を迎えた。軍事クーデタ直後のRCCは、イスラームに親和的であった。1969年の革命宣言でもアラブ社会主義にはイスラームは必要不可欠な要素だと言明された。この時期、カッザーフィーは著名なイスラーム法学者を公の場で重用し、自らの政権の正統性を高めることに利用した [Gambill 2005]。

しかしながら、1973年になるとこのカッザーフィーの対応は一変する。彼はチュニジア国境近くのズワラ（Zuwāra）においてリビア文化革命を宣言し、反革命分子の掃討を開始した。その結果、同胞団とイスラーム解放党（Ḥizb al-Tahrīr）を中心に約400人の関係者が治安部隊に拘束された [Joffe 1988:615]。

続いて1977年の人民主権確立宣言においては、全国民が直接政治に参加するという新しい民主制「ジャマーヒーリーヤ体制」を施行するために、政党活動や宗派主義などが禁止された。カッザーフィーの言葉では、政党や宗派などは「伝統的な統治手段の道」であるという。しかし、カッザーフィーは「伝統的な統治手段の道」である、政党や特定の宗派などによる政治は否定しながらも、「聖典コーランはリビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリヤにおける社会法則」としてクルアーンを法の源泉としている [リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリア人民局 1981: 5]<sup>8</sup>。それは、カッザーフィーの革命の理論書『緑の書』でも同じであり、特定の政党、宗派が社会を支配することに対して非難しているが、宗教を離れて制定された法は非論理的だとしており、イスラームを重要視している姿勢が窺える [カッザーフィー 2011:20-24]

しかし、イスラームに対するカッザーフィー独自の解釈は、専門家の中でも意見が分かれている。Joffé [1988] は、カッザーフィーのイスラームに関する言説は、スンナ派ムスリムの間では異端として広く認識されているとしたが、Gambill [2005] は、この時代に見られるカッザーフィーの宗教的言説は、大きく正統スンナ派から脱線しているものではないとしている。

とはいえ、1970年代にカッザーフィーは、自ら以上に社会的影響力のある異端な宗教関係者や組織の排除を進めることによって、自らが解釈するイスラームを正当化し、政権の安定化を図った。有名なイスラーム法学者の多くは国外に追いやられ、国内に留まった宗教関係者は粛清された。たとえば、ムハンマド・バシーティー (Moḥammed al-Bahsītī) が1981年に政府治安部隊から拷問を受け、殺された事件などが有名である [Pargeter 2005]。

## (2) 先鋭化するイスラーム主義

1969年の軍事クーデタ直後、カッザーフィーはイスラームに親和的であったが、1970年代初頭から大規模なイスラーム主義者の逮捕を進めるようになった。それは1980年になっても変わらず、同胞団とイスラーム解放党関係者への厳しい弾圧は続いた<sup>9</sup>。1984年にはファーティハ大学 (現・トリポリ大学) で、カッザーフィー政権下において初めてイスラーム主義者に対し、公開処刑が行なわれた。ベンガージでもイスラーム主義者の公開処刑が行なわれている [Joffé 1988: 615] [Ende 2010:458]。それだけでなく、海外に逃亡した同胞団関係者、解放党関係者が暗殺される事件も頻発した<sup>10</sup>。

小林 [2013:47-48] も指摘しているように、1980年代のイスラーム主義団体への激しい弾圧に対する反動で、1990年代にはカッザーフィー政権を転覆させようとする急進的な動きが強まる。その中で一番急進的な組織は、リビア・イスラーム闘争グループ (LIFG: Libyan Islamic Fighting Group, al-Jamā'a al- Lībīya) であった。

LIFGはアフガニスタンでソ連軍との戦いに従事した後に帰国したリビア人義勇兵や、リビアに帰国せずにスーダンなどのアル・カーイダ系のキャンプで訓練を受けたリビア出身者によって設立された。同組織は、アル・カーイダやターリバーンと関係があったため、国連からテロ組織と認定されている<sup>11</sup>。1990年代にLIFGは、カッザーフィーに対して暗殺を複数回試みている<sup>12</sup>。これにより、カッザーフィーはLIFGを含むイスラーム主義者に対する弾圧を強め、相当数のLIFGや同胞団関係者をトリポリ郊外のアブー・サリーム刑

務所に収容した。同刑務所では、1996 年前後に 1200 人以上にのぼる人々が拷問や病気、飢えで亡くなっていることが報告されている<sup>13</sup>。この事件についての調査を要求した人権派弁護士、ファトヒー・ティラビル (Fathī Tirbil) の不当逮捕に対する抗議が 2011 年の反体制デモに変移したことをここで補足しておきたい。

このように 1990 年代において、カッザーフィーの最大脅威は LIFG であった。しかし、2000 年代になると、カッザーフィーの次男であるサーイフ・イスラーム (Sayf Islām al-Qadhdhāfi) が、カッザーフィー基金を通して LIFG やその他反体制派とカッザーフィーとの間の仲裁を開始した。このサーイフ・イスラームの恩赦プログラムで、アブー・サリーム刑務所から 200 人以上に及ぶ LIFG 関連の人間が釈放されている。2009 年には、収監されていた LIFG 上層部が以後暴力を用いないことを公表した [Blanchard 2011:20-25]。このことが足かせとなり、2011 年に反体制運動がリビア国内に広がった際、LIFG の戦闘への参加は出遅れた。また同胞団も、2010 年にサーイフ・イスラームの仲裁で、カッザーフィーとの和解が成立した。そしてアブー・サリーム刑務所から 200 人以上の同胞団関係者が釈放されている。

表 1. カッザーフィー政権時代の主なイスラーム主義組織

グループ名	親団体 協力団体	設立年、設立地	イデオロギー	選挙制民主主義	武力行使	備考
リビア・ムスリム同胞団 (Jam‘īya al-Ikhwān al-Muslimīn fī Libiā)	エジプト・ムスリム 同胞団	リビア・1949	同胞団	賛成	反対	
リビア国民救国戦線 (National Front for Salvation of Libya: NFSL, al-Jabha al-Waṭaniya al-Naqdha)	リビア・ムスリム 同胞団	スーダン 1981	一部同胞団	賛成	容認	1984年クーデタ未遂  国民勢力連合の 前身
イスラーム社会運動 Islamic Rally Movement (Ḥaraka al-Tajama‘a al-Islāmīya)	リビア・ムスリム 同胞団	スイス 1992	同胞団	賛成	容認	
リビア・イスラーム戦闘 グループ (LIFG: al-Jamā‘a al-Libiya al-Muqātila)	アフガニスタン 武装集団 アル・カーイダ	パキスタン 1990	ジハード主義	反対 2011年以降容認	2005年まで容認 及び推進  2009年以降反対	カッザーフィー 暗殺未遂複数回  2003年5月モロッ コでの自爆テロに 関与
イスラーム殉教運動 (Ḥaraka al-Shuhadā al-Islāmīya)	ジハード団 (エジプト)  アフガニスタン 武装集団	リビア 1989	ジハード主義	反対	反対	

[出所] Brookings Doha Center [2012] 及び各種報道機関より筆者作成

### 3. カッザーフィー政権崩壊以降の混乱

#### (1) トリポリ政府とトゥブルク政府

カッザーフィー政権崩壊後のイスラーム主義組織の動きについてまとめておく。同胞団は、2012年の国民制憲議会（GNC）選挙に公正建設党（Ḥizb al-‘Adāla wa al-Binā’）として参加し、比例代表枠（80席）で同党は17席を獲得した。公正建設党は、与党のリベラルな国民勢力連合（Taḥālf al-Quwā al-Waṭaniya）に続き、第2党となった。他方、LIFGは、2011年2月にベンガージで反体制デモが起こってもすぐに反体制派と合流はしなかった。LIFGは時局に乗り遅れた感が否めず、2012年の国民議会選挙でもLIFG関連の国民党（Ḥizb al-Waṭaḥ）とウンマ（Ḥizb al-Umma）党は、合わせて1議席しか獲得することができなかった。

また、2014年6月末に行なわれた代表議会（Majlis al-Nuwwāb）選挙においても、リベラル派が多数を占めたと考えられている<sup>14</sup>。当初、この新しい代表議会は2014年8月に発足する予定であった。しかし公正建設党を中心とした旧GNCの議員たちは、選挙の違法性を訴えて代表議会の発足に反対した。他方、この代表議会選挙を有効だとする世俗派を中心とする議員たちは、東部地域のトゥブルクに代表議会を移動させ、議会を発足させた。このトゥブルクという町は、東部地域の中でエジプトに最も近い都市である。現在、エジプトが同胞団の動きに対して厳格な監視体制を敷いているため、セキュリティ上、世俗派はこの地を選んだとも考えることができるであろう<sup>15</sup>。

#### (2) キレナイカの自治を求める連邦主義組織

カッザーフィー政権崩壊後に表出した連邦主義の再興について説明したい。2012年3月、同年6月に行われる予定であった（施行7月）国民暫定評議会（National Transitional Council: NTC, al-Majlis al-Waṭanī al-Intiqāli）での議席（200席）の配分が発表された。その内訳は、西部地域100議席、東部地域60議席であった。この議席数は人口比から配分されたと説明されたが、西部と東部の歴然たる差がキレナイカの自治を求める運動に拍車をかけた。このキレナイカの自治を要求する連邦主義組織は2つある<sup>16</sup>。まず、サヌースィー王家の血統にその正統性を求める「伝統的な」連邦主義と、他方はキレナイカとトリポリタニアの平等な利益分配を要求するためには、武力行使も辞さない「急進的」な連邦主義である。

まず、サヌースィー王家の血統をその正統性とする伝統的連邦主義組織とは何かを述べたい。この組織の中心人物は、イドリース1世の甥にあたるアフマド・ズバイル・サヌースィー（Aḥmed al-Zubayr al-Sanūsī）である。彼は2012年3月にバルカ暫定評議会（Majlis

al-Intiqālī liqlīm Barqa) を発足させた。アフマドは完全な独立を求めずに、あくまで高度な自治を要求している<sup>17</sup>。アフマドは、サヌースィー王家の中で一人だけイラクの士官学校で本格的な軍事訓練を長期にわたって受けていた。1969年の軍事クーデタ直後、1970年にカッザーフィーに対してクーデタを企てた罪で拘束され、RCCが開いた人民裁判によってアフマドの死刑が確定された。それ以来30年以上、投獄されていたが、2001年に恩赦によって解放されたアフマドは、現在に至るまで反カッザーフィー派を代表するシンボリックな存在である。彼は軍人出身でもあるが、連邦主義を達成するための武力行使には反対の立場である。

他方、サヌースィーの血統に依拠する伝統的連邦主義とは異なり、武力行使によって連邦制を達成しようとする急進的な動きも出てきた。この動きの中心人物はまだ30代であるイブラーヒーム・ジャドゥラーン (Ibrāhīm al-Jaḍrān) という青年である。彼はサヌースィー王家との血縁関係はない。2013年11月にジャドゥラーンもまたキレナイカの自治を宣言し、内閣や議会を設置した。このリーダー格のジャドゥラーンは、2012年にシドラ湾を警備する石油施設警備隊 (Petroleum Facilities Guard: PFG, Ḥarasa al-Mansh'āt al-Naftīya) のリーダーとなった。しかし、トリポリの国民議会 (GNC) が石油収入を独占することに反発し、シドラ湾の石油施設を長期にわたって占拠した。この事件により、リビアの石油の輸出は激減し、不安定な経済に更なる打撃を与えた<sup>18</sup>。

### (3) ベンガージにおける武装組織

ベンガージにおける戦闘状況については不明な点が多い。2014年12月の会見で在アメリカ米軍総司令官のデービッド・ロドリゲスは、記者から「誰がリビア東部を掌握しているのか」と問われ、「複数の民兵組織、複数の政府、正直に言えば、リビア東部は流動的で誰が掌握しているのかわからないほどの大きな混乱である」と返答している [U.S.Department of Defense 2014]。加えて、2014年12月末に複数のベンガージ住民<sup>19</sup>から話を聞いたところ、戦況や軍事組織に関する情報が個人によって大きく異なっていた。従って、現在のベンガージの治安や武装組織の状況についての確定的な分析は難しいものの、報道やシンクタンク、現地インフォーマントの談話等、複数の情報に基づいて、現在のベンガージの武装組織の状況について考察を試みたい。

現代のリビア東部地域で台頭し、混乱を引き起こしているのは、2011年以降に設立された新規のイスラーム武装組織であり、主な組織は「リビアの盾第一 (Dara'a Libīyā 1)」以



下、表2に記載した7つである。

政府が2つになる2014年前半までは、リビアの盾第一、「ラーフッラー・サハーティー旅団 (Katība Rafallāh al-Saḥātī)」、「2月17日殉教旅団 (Katība Shuhadā 17 Fibrāyr)」の3組織は、再編まならないリビア軍に代わって政府公認の民兵組織として、ベンガージの治安秩序の回復を担った。これら3組織は、しばしば暴力の排除を求めるリベラル派の市民デモ隊との間で衝突を起し、犠牲者を出している。これら3組織は、現在はイスラーム主義者が多数を占めるトリポリの政府 (GNC) によって支援されている。世俗派のベンガージ市民が治安回復において頼りにしているのは旧リビア特殊部隊のサーイカである。

しかし、政府が世俗派と同胞団派の2つに分裂して以来、リビアの盾第一、ラーフッラー・サハーティー旅団、2月17日殉教旅団の3組織は、現在リビアで最も過激な民兵組織の一つであるアンサール・シャリーア (Anṣār al-Sharī'a<sup>20</sup>) に急速に接近し、ハリファ・ハフタル (Khalīfa Ḥaftar)<sup>21</sup>率いるリビア軍に対し連携して攻撃を続けている。2014年末現在、世俗派の代表議会によりリビア軍は正式に「国軍」と認められ、穏健、過激派関係なくイスラーム民兵組織に対して空爆を中心とした攻撃を継続している。

カッザーフィー政権崩壊後、東部地域には急ごしらえのイスラーム組織が次々と結成され、戦闘で生活基盤を失った若者たちが参加しているように報道された。しかし、これらの組織はカッザーフィーの崩壊を機に表出した新興の民兵組織のように見えるが、実はそうではなかった。現在、リビア東部地域に本拠地を置くイスラーム組織はLIFGの分派であったり、旧LIFG戦闘員が武装組織の設立に深く関与している (表2参照)。いくつかの組織では、旧LIFG戦闘員が司令官として直接旅団を率いている。すなわち、ベンガージのイスラーム組織の全てに、戦闘に関してはプロフェッショナル並の人間が関わっているということである。一昔前、カッザーフィー体制転覆を試みた旧LIFGメンバーは、戦闘に関する知識も、人的資源確保の方法もそして対外的なネットワークも持っている。歴史的にLIFGはアル・カーイダ、そして最近ではイスラーム・マグリブ諸国のアル・カーイダ (AQIM: al-Qaeda in the Islamic Maghreb, Tanzīm al-Qā'ida fī Bilād al-Maghrib al-Islāmī) など過激派組織との強い協力関係があることがわかっている。

また、リビア東部、特にベンガージやダルナという土地柄も、カッザーフィー体制崩壊後に多くのイスラーム主義組織を誕生させた要因の一つと考えられる。リビア東部地域の住民は、カッザーフィー体制の下においても連邦主義者だけでなく、アフガニスタンやパキスタンに戦闘員を送り込んだLIFGや、地下で活動する同胞団などに同情的であったとい

う [Chorin 2012:181]。このような話は、Chorinだけの言説でなく、筆者がインタビューしたベンガージ住民の一人からの「カッザーフィー時代にも同胞団の活動は日常生活の中で見聞きすることは頻繁にあった」との話にも裏づけられる<sup>22</sup>。

1980年から1990年にかけてカッザーフィーは、イスラーム主義者に対して完膚なきまでに肅清をしたことは多くの報道等で知られているが、新しい世紀に入ってLIFGや同胞団のメンバーの多くを釈放したという事実に加え、彼らのその後について論じた研究や報道も寡聞にしてなきに等しい。しかし、2011年以降、LIFGメンバー主導で設立された民兵組織の急速な伸長の背景には、2000年以降に当局から釈放されたイスラーム主義者達が東部地域にネットワークを再構築していたことが考えられる。

表 2. リビア東部地域を拠点とする武装組織一覧(2014 年末現在)

組織名	拠点	政府との協力関係 (2014 年 8 月以前)	LIFG との関係	他組織とのつながり
リビア軍 (al-Quwwāt al-Musālḥa al-Lībīya)	主にベンガージ トリポリ	○あり	×なし	協力関係
サーイカ(旧リビア特殊部隊) (Al-Ṣā'iqā)	主にベンガージ	○あり	×なし	
石油施設警備隊(PFG) (Ḥaras al-Mansh'āt al-Nafīya)	シドラ湾石油施設	○あり 2014 年に GNC と反目。 2014 年末現在には代表議 会(トゥブルク)側	×なし	
リビアの盾第一 (Dara'a Lībīā 1)	ベンガージ	○あり 2013 年 9 月、この 3 組織 をゼイダーンは政府承認 の組織であると発表  2014 年現在、この 3 組織 は GNC 支援下、リビア軍 のハフタルの尊厳作戦に 抵抗	○あり 元メンバーが設立	・リビアの盾の他部隊は、ベ ンガージ以外の他地域にも 展開中
2 月 17 日殉教旅団(17FMB) (Katība Shuhadā 17 Fibrāyr)	東部各地 クフラ		○あり 元メンバーが設立	
ラーフッラー・サハーティ旅団 (Katība Rafallāh al-Saḥātī)	ベンガージ クフラ		○あり 元メンバーが設立	○17FMB からの分派 2012 年の米国大使殺害に 関与しているとされる
アブー・サリーム殉教旅団 (Katība Shuhadā Abū Salīm)	ダルナ ベンガージ	×なし	○LIFG が母体	○AQIM
アンサール・シャリーア・ベンガージ (Anṣār al-Sharī'a fi Benghazi: ASB)	ベンガージ	×なし	○	○AQIM ○アル・カーイダ
アンサール・シャリーア・ダルナ (Anṣār al-Sharī'a fi Darna: ASD)	ダルナ	×なし	○あり アブー・サリーム殉 教旅団から分派	○アラビア半島のアル・ カーイダ ・ASB とは公式な関係なし
ウマル・ムフタル旅団 (Katība Shuhadā 'Umar Mukhtār)	ダルナ ベンガージ アジュダビーヤ	×なし	○あり 元メンバーが設立	

下に向かうほど急進的、一般人に対する被害を出している。

[出所] 各種報道を基に筆者作成

## おわりに

この章では、2011年のカッツァーフィー体制崩壊後、連邦主義とイスラーム主義という2つ組織の再興によって、リビア東部地域では混乱がより増幅されていることに着目し論じてきた。リビアが近隣諸国の権威主義体制が崩壊した国々と比べて特徴的であったのは、連邦主義者が再興したことであった。リビア東部地域の連邦主義の2つの組織はいずれも、第二次世界大戦の後に独立したリビア連合王国の地域区分、つまり「キレナイカ(バルカ)」という地域単位で自治を要求した。本稿では、支配一族であるサヌースィー家の歴史やリビア王国の歴史と関連づけながら説明した。

一方で、ベンガージを中心とする東部地域で多数誕生しているイスラーム系民兵組織は、新興組織のように報道されているが、実はリビアの抑圧された歴史的背景の下で形成されてきた点を指摘した。いずれの時代を通して、東部地域は同胞団、急進派イスラーム主義の揺籃の地であった。しかし、カッツァーフィーは、全てのイスラーム主義組織を同一に激しく弾圧し、それゆえ各イスラーム組織は地下活動や外国への逃亡を余儀なくされた。1980年から1990年代にかけては、強まるばかりの弾圧に呼応して、カッツァーフィーに対する暗殺未遂が何度も起こった。

反カッツァーフィー派の中で、最も武闘派であったのはLIFGであった。本稿では、現在伸長しているイスラーム民兵組織の誕生にLIFGが強く関与していることを示した。2011年にLIFGはリビアの新しい政府(NTC)に包摂されたが、2012年の国民制憲議会(GNC)では議席をほとんど得ることができず、政治的権力を持つことが許されなかった。しかし、カッツァーフィー政権崩壊から3年近くの月日が経つにもかかわらず、国は世俗派と同胞団が国を分断し、対立は深まるばかりである。政治は混乱し、国軍を再編するどころの段階ではない。その結果、リビア東部地域では政府の力が及ばない期間が長くなった。政治の混乱に乗じてLIFGメンバーはキレナイカのイスラーム系組織設立に協力し、そして組織の中心として暗躍している。新興に見える組織も元LIFGが関与しているため、周辺国とのネットワークが予め構築されており、内戦は長引くことが予想される。

現在、リビアは混乱を極めており、特に東部、そして内陸部はテロリストの温床となっている。リビアから流出入する武器、資金、そして人に一層注視し、継続的に分析することが今まで以上に求められている<sup>23</sup>。

## 【参考文献】

### [日本語]

小林周「リビアにおけるイスラーム主義組織展開の歴史的背景—新政権下におけるサラフィー主義の台頭を踏まえて」『中東研究』第517号(2013年)中東調査会、46-53頁。

ムアンマル・アル・カッザーフィー『緑の書 — アル・キターブ・アル・アフダル』藤田進訳、(第三書館、2011年)。

リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリア人民局『人民主権の紹介』(リビア・アラブ社会主義ジャマヒリヤ在日人民広報部、1981年)。

### [外国語]

Blanchard, Christopher M. *Libya Unrest and U.S. Policy*. (Washington, D.C.: Congressional Research Service, 2011)

Ashour, Omar. *Libyan Islamists Unpacked: Rise, Transformation, and Future* (Doha: Brookings Doha Center, 2012)  
<<http://www.brookings.edu/~media/research/files/papers/2012/5/02%20libya%20ashour/omar%20ashour%20policy%20briefing%20english.pdf>> accessed on December 1, 2014.

Chorin, Ethan D. *Exit the Colonel: the Hidden History of the Libyan Revolution* (New York : Public Affairs, 2012)  
Ende, Werner, and Udo Steinbach. *Islam in the World Today : A Handbook of Politics, Religion, Culture, and Society* (Ithaca, N.Y. : Cornell University Press, 2010).

Gambill, Gary. *The Libyan Islamic Fighting Group* (LIFG). (Washington, D.C.: Jamestown Foundation, 2005)  
<[http://www.jamestown.org/single/?tx\\_ttnews%5Btt\\_news%5D=308#.V14Elssf74](http://www.jamestown.org/single/?tx_ttnews%5Btt_news%5D=308#.V14Elssf74)> accessed on December 1, 2014.

Joffé, George. "Islamic opposition in Libya". *Third World Quarterly*, vol.10, no.2 (January 1988), pp. 615-631.

Pargeter, Alison. *Political Islam in Libya*. (Washington, D.C.: Jamestown Foundation, 2005)

<[http://www.jamestown.org/single/?tx\\_ttnews%5Bsword%5D=8fd5893941d69d0be3f378576261ae3e&tx\\_ttnews%5Bexact\\_search%5D=Alison%20Pargeter%20&tx\\_ttnews%5Btt\\_news%5D=306&tx\\_ttnews%5BbackPid%5D=7&cHash=1311e1ee2b0ad780c1e68c6dd0cec130#.VNq4fMsfq74](http://www.jamestown.org/single/?tx_ttnews%5Bsword%5D=8fd5893941d69d0be3f378576261ae3e&tx_ttnews%5Bexact_search%5D=Alison%20Pargeter%20&tx_ttnews%5Btt_news%5D=306&tx_ttnews%5BbackPid%5D=7&cHash=1311e1ee2b0ad780c1e68c6dd0cec130#.VNq4fMsfq74)> accessed on December 1, 2014.

U.S. Department of Defense, *Department of Defense Press Briefing by Gen. Rodriguez in the Pentagon Briefing Room on Ebola Response* (Virginia, 2014)

<<http://www.defense.gov/Transcripts/Transcript.aspx?TranscriptID=5548>> accessed on January 1, 2014.

### [新聞]

Al Arabiya News	<a href="http://english.alarabiya.net/">http://english.alarabiya.net/</a>
Asharq al-Awsat	<a href="http://www.aawsat.net/">http://www.aawsat.net/</a>
Libya al-Mostakbal	<a href="http://www.libya-al-mostakbal.org/">http://www.libya-al-mostakbal.org/</a>
Libya Herald	<a href="http://www.libyaherald.com/">http://www.libyaherald.com/</a>
Magharebia	<a href="http://magharebia.com/">http://magharebia.com/</a>
The Tripoli Post	<a href="http://www.tripolipost.com/">http://www.tripolipost.com/</a>
The Guardian	<a href="http://www.theguardian.com/uk">http://www.theguardian.com/uk</a>

### [ウェブページ]

Al Jazeera	<a href="http://www.aljazeera.com/">http://www.aljazeera.com/</a>
BBC	<a href="http://www.bbc.com/">http://www.bbc.com/</a>

## —注—

- <sup>1</sup> 日本の報道機関では、リビア東部地域の最大都市は「ベンガジ」と明記される。しかし本稿では、地元の人々の発音に従い「ベンガージ」とした。
- <sup>2</sup> 1951年リビアの地が連合王国として独立を果たした際、トリポリタニア（リビア西部）・キレナイカ（リビア東部）・フェザーン（リビア内陸部）という3つの地方政府、そして王国中央政府の合計4つの政府が国家の中に存在した。
- <sup>3</sup> 2014年8月、公正建設党(Hizb al-‘Adāla wa al-Binā’)を中心とした国民議会(General National Congress: GNC, al-Mu’tamar al-Waṭanī al-‘Ām)が支援する「リビアの夜明け」というイスラーム系民兵組織連合とハリーフア・ハフタル率いるリビア軍が交戦した。2014年末現在、トリポリ国際空港はGNC側が占拠している状態である。詳しくはAl-Arabiaのウェブページを参照：  
<<http://english.alarabiya.net/en/perspective/alarabiya-studies/2014/08/25/Libyan-Dawn-Map-of-allies-and-ene-mies.html>>
- <sup>4</sup> 2014年9月18日から20日にかけて、ベンガージ市内で少なくとも14人が暗殺された。ほとんどが一般人であり、10代の人権活動家2人も含まれている。詳しくはHuman Rights Watchのウェブページを参照<<http://www.hrw.org/news/2014/09/23/libya-assassinations-may-be-crimes-against-humanity>>
- <sup>5</sup> 首都トリポリでの犠牲者の数は、ベンガージでの犠牲者の半数以下であった。
- <sup>6</sup> 19世紀中盤から20世紀初頭にかけて、このサヌースィー教団の勢力は現在のスーダンやエジプトにも広がっていた。
- <sup>7</sup> 植民地支配によるキレナイカ住民の犠牲者数は、資料によってばらつきが見られる。
- <sup>8</sup> ここでは文献の表記に従い「ジャマヒリヤ」とした。アラビア語転写はジャマーヒーリーアである。
- <sup>9</sup> カッツァーフィー時代の反体制勢力は、イスラーム主義者だけでなく、旧王制派、民主主義を求める組織などであった。
- <sup>10</sup> 1980年にリビアの解放党の関係者であり、BBCのアラビア語放送のアナウンサーでもあったムハンマド・ラマダンがロンドンで暗殺された事件はよく知られる。
- <sup>11</sup> 対ターリバン、アル・カーイダ制裁委員会（国連安保理決議第1267号に拠り設置）でLIFGはテロ組織に指定された。LIFGのメンバーであるアブー・ヤヒヤー・リビー(Abū Yahya al-Lībī)はアル・カーイダの主要メンバーでもあった。2015年1月上旬、リビーは勾留先の米国で亡くなった。
- <sup>12</sup> LIFGによる最後のカッツァーフィー暗殺未遂は、1996年であった。
- <sup>13</sup> 2004年4月、カッツァーフィーは公にアブー・サリーム刑務所で収容者が殺されていたことを認めた。詳しくは、Human Rights Watchのウェブページを参照：<<http://www.hrw.org/news/2006/06/27/libya-june-1996-killings-abu-salim-prison>>
- <sup>14</sup> 2014年の選挙は政党間の緊張を緩和するために比例制は導入されなかった。ある程度、イスラーム主義者の議席数は予想できるが、正確な数を出すには更なる調査が必要となる。
- <sup>15</sup> アブドゥッラー・スィーニー(‘AbdAllāh al-Thānī)首相を筆頭とした代表議会の主要メンバーは、警備の都合でギリシャ政府が提供したヨットに滞在していると報道されている。
- <sup>16</sup> 筆者は、これら2つのグループは連邦制を求めているが、武力行使に関する考えが全く異なること、また独自の内閣を設置していることを鑑みてこのような区分を用いて説明をした。この2つのグループが共に利権の集中するキレナイカ地域の完全な独立ではなく、なぜ連邦制を志向しているのかについては今後の研究の課題としたい。
- <sup>17</sup> バルカ暫定評議会では、議会、警察、裁判所などを設置予定だとしている [BBC 6 Mar 2012]。
- <sup>18</sup> 2014年3月、石油施設警備隊(PFG)は北朝鮮船籍のタンカー「モーニング・グローリー」号に、カッツァーフィー政権崩壊後初めて原油を積み出し輸出した。この事件でPFGが政府の管理下に置かれていないことが露呈し、国民議会(GNC)のアリー・ゼイダーン首相は辞任に追い込まれる。
- <sup>19</sup> 2019年12月、大学教員を中心とするベンガージ住民3名を対象とした筆者によるインタビュー。
- <sup>20</sup> 補足となるが、アンサール・シャリーアは東部地域に2組織存在する。これらは設立者、誕生の過程が異なっているため、公式な同盟関係はないと見られていた。しかし、両組織はハリーフア・ハフタルの攻撃に対し接近しているようである。またアンサール・シャリーア・ベンガージは、アル・カーイダやチュニジアの同名グループとの関係を否定しているが、その真偽は不明である。
- <sup>21</sup> ハリーフア・ハフタルはカッツァーフィー時代の将校である。1980年代チャド戦争に対する見解でカッツァーフィーと意見が相違し、ハフタルは米国に20年以上亡命をしていた。彼は2月17日革命をきっかけにリビアに帰国し、リビア軍を率いイスラーム主義掃討作戦を展開している。この「尊厳作戦」はトゥブルクの代表議会が支持している。
- <sup>22</sup> 2014年12月22日のインタビュー。

- <sup>23</sup> 2014年11月、在アフリカ米軍総司令官であるデービッド・ロドリゲスは、ベンガジに「イスラーム国」の訓練キャンプが存在することを報告した。しかし、このキャンプはまだ設置初期段階であるという。